



春日小だより

令和 7 年 10 月 31 日
練馬区立春日小学校
校長 後藤 京子
学校通信 11 月号

高め合うために必要なことは

副校長 市 村 大

子供の頃、水泳・書道・体操・英語…いろいろな習い事をしました。それ自体は良い経験だったと思うし、親も様々なことを考えて機会をくれていたのだと思います。でも、実は本当に習いたかったものが他にありました。それはピアノです。憧れの楽器でした。その気持ちは大学生になっても変わらず、19歳の時に近所のピアノ教室の門を叩きました。ピアノの先生は、突然現れたよくわからない学生に大変驚いたと思いますが、私の話を聞いてくださり、快く迎え入れてくださいました。そこから約5年間ピアノを学び、他の習っている子供たちと一緒に発表会にも出ました。振り返ると、我ながら突拍子もないことをしたものです。今は私の子供たちが、その教室でピアノを学んでいます。

ほんの少しですがピアノが弾けるようになった私は、教員1年目に1年生を担当し、音楽の授業も張り切って準備をしました。1年生には音楽専科が付かないので、担任が授業をしていたのです。朝早くから教室でオルガンを練習し、拙いながらも伴奏を覚えて授業に臨みました。しかし、どんなに頑張っても、子供たちがあまり歌ってくれません。鍵盤ハーモニカも、どこかぎこちなく、常にずれています。なんで歌ってくれないのか、演奏を合わせてくれないのか、イライラした気持ちが募りました。そのことを学年主任の先生に話すと、強烈な一言が返ってきました。「あなたね、自分のことばかり考えてて、子供たちのこと見てないでしょ？」…ハッとしました。伴奏中、私は子供たちのことをほとんど見ていませんでした。自分の演奏に合わせてさせることばかりで、子供たちの呼吸を全く感じていなかったのです。「難しい伴奏はしなくていいから、子供を見て、子供の表情を読みなさい。」そのようにご指導をいただき、向き合い方を変えました。伴奏は主旋律や和音だけでいい。多少間違えてもいい。子供たちを見て、その呼吸に合わせるようにしました。すると、子供たちの歌声が変わりました。表情も笑顔が増えました。指導している私も以前にはなかった楽しさを感じるようになりました。

正しくきれいに演奏すること、それに合わせること。プロならば当然かもしれませんが、音楽の授業ではそれが絶対の正解ではないことを学びました。音楽が得意な子もそうではない子もいるのです。その全員を巻き込んで音楽を奏でていくためには、自分のことばかり考えていてはだめで、相手を理解するように音を聴き合うことが必要でした。

春日小では、21日・22日に3年に一度の音楽会が行われます。音楽に対して様々な思いをもつ子がいると思いますが、舞台に立っているみんなが音を合わせていく楽しさを実感できるように努めていきます。そして、会場にいる全員が、「音」を「楽しめる」ような、素敵な会にしていきたいと思います。たくさんの皆様のご来場をお待ちしています。